

北海之光

10月号 北海道教区報

どのような道を歩むときにも主を知れ
主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる

箴言3章6節

発行所 北海之光社
001-0015 札幌市北区北15条西5丁目1-12

日本聖公会北海道教区事務所

電話 011-717-8181

FAX 011-736-8377

E-mail:hikari@nshk-hokkaido.jp

http://www.nshk-hokkaido.jp

発行人 笹森田鶴

150⁺th

五羽目の雀

苦小牧聖ルカ教会牧師

室蘭聖マタイ教会管理牧師

函館聖ヨハネ教会協働司祭

司祭 グレゴリー 松井新世

「木の芽どき」と言って、春の緑が出る頃になると、人によっては、何となく不具合の日が続く。

その同じ理由で、夏から秋へ移るその境にも、具合のすぐれない期間がある。この間の言葉が見つからない。はつきりと秋になり切つて、色づいた木の葉が散るようになれば、気持ちちは安定する。だが、緑でありながら、それが妙に勢いを失い、風の音を聞いていると、痛んだところによからうものはない。

今年が季節が一ヶ月ずれているという。普段の秋は、と尋ねたところで、何にならう。秋は読書。今秋、手に取ったハン・ジョンウオン著、橋本智保訳『詩と散策』は、手触りよい詩集だった。何よりの収穫は、詩人が自身、よく転ぶと告白していること。

「たいていはよそ見をしているから」というが、僕は安堵した。

僕もたびたび転ぶ。詩人のように何かに関心を向けてということではない。ただ体のバランスが悪いのだ。着ぐるみキャラのようだと思めてくれる友もいる。その上だいたいが上の空、まっすぐどころかひねくれている。自身不良品に近いものとみている。事実無理をすると発作が出る。無理しようにも無理できない。

聖書の中に「五羽の雀」という表現がある。「五羽の雀は二アサリオンで売られているではないか」(ルカ福音書一二章六節)これと似た言葉がマタイ福音書にもある。こちらは「二羽の雀は一アサリオン」とある。こちらをもとに考えると、五羽目はおまけ

とも取られないか。そんなおまけでも、神のお許しがなければ地に落ちることはない。この「五羽目の雀」は僕自身に重ねられる。

幼い頃、何度か転校した。最初の転校が決まった時、僕は駄々をこねた。そんな僕は父は夕刻、雑然とした新宿に連れて行つた。そこには二軒のペット屋が軒を連らね、父は言った。「好きな子犬を選びなさい」と。息子には、この先には同伴する存在が必要だと考えていたのか。僕は悩んだ。最初の一軒には足を引かざる子犬が、もう一軒には普通の子犬がいて、最初に見た子犬に惹かれていた。まなこが優しいし、しかも安いと。

最近父が仕事を辞め、母がお琴を手放したことを知っていた。母と業者が相談中、僕は居心地悪く、冷蔵庫に貼ったシールを眺めていた。幼いなりに、家計が大変だとは理解していた。

僕は何度か店を往復して、足を引きずっていない子犬を選んだ。飼育が大変だと考えたのか。僕には、六つ離れた弟がいた。先天性の心臓疾患

があり、手術をしたばかりだった。虚弱で手がかかる。今後兄としてしっかりしなければと思うのと、もつと甘えたい心があったかと思う。覚えていたのは、その直後、父の顔を見られなかったことだ。

その後の引越先で吃音になった。当時、その理由は分かっていたが、その行き先がなかった。不思議なもので、その四五年後、福音記者マルコが伝えるイエスの弟子たちに対する「沈黙」命令を黙想し、ようやく語り得ない思い、いたみの先の恵みに、行けつめたのは、長年の沈黙ゆえであった。

慣れ親しんだ風景を後にして、そこで背負ってきた荷を降ろし、また積んでいく。

今年、そこにはカササギを愛する者が横にいた。秋の陽光の斜めに光を裂くように飛び跳ねていた枝の上の雀たちはお喋りをやめ、首を縮めひと言交わし合う。口惜しいが僕には未だ理解出来ない。